

令和4年度 第1回「琉球文化ルネサンス」に関する万国津梁会議 議事録

(1) 会次第等

令和4年度 第1回「琉球文化ルネサンス」に関する万国津梁会議 会次第

日時：2022年6月9日（木） 16：00～18：00

場所：沖縄県市町村自治会館

1. 開会・あいさつ
2. 令和4年度 万国津梁会議の進め方について 【資料1】
3. 議 題
 - ①県の関連施策の状況について 【資料2】
 - ②具体的な事例検討の方向性について 【資料3】
4. 閉会・事務連絡

【配付資料】

- ①会次第
- ②「琉球文化ルネサンス」に関する万国津梁会議 委員名簿
- ③配席図
- ④資料1 令和4年度 万国津梁会議の進め方について
- ⑤資料2 県の関連施策の状況について
- ⑥資料3 具体的な事例検討の方向性について
- ⑦参考資料1 中間報告（概要版）
- ⑧参考資料2 新・沖縄21世紀ビジョン基本計画 <抜粋>
- ⑨参考資料3 文化等に関する県の施策（個別計画）
 - ・第9次沖縄県伝統工芸産業振興計画 <抜粋>
 - ・首里城復興基本計画 <抜粋>
 - ・後期「しまくとぅば」普及推進行動計画 <抜粋>
 - ・沖縄の伝統的な食文化の普及推進計画 <抜粋>
 - ・沖縄空手振興ビジョン <抜粋>
- ⑩参考資料4 委員のこれまでの主な意見
(当日配布) 参考資料 令和4年度 沖縄県文化芸術振興条例に基づく施策体系別事業一覧

(2) 出席者

■委員

| 氏名 | 分野 | 職名等 | 出欠 |
|---------|-----------|---|-----|
| 波照間 永吉 | 文学 | 名桜大学大学院 国際文化研究科長 教授 | ○ |
| 山里 勝己 | 文学 | 名桜大学大学院 国際文化研究科 教授 | ○ |
| 大田 静男 | 歴史 | 八重山歴史・芸能研究家 | ○ |
| 上里 隆史 | 歴史 | 琉球歴史研究家 | ○ |
| いのうえ ちず | 文化 | 雑誌「モト」編集長 | ○ |
| 富田 めぐみ | 伝統芸能 | 合同会社琉球芸能大使館 代表 舞台演出家 | ○ |
| 嘉数 道彦 | 伝統芸能 | 沖縄県立芸術大学 音楽学部 琉球芸能専攻 准教授 | 欠席 |
| 小渡 晋治 | 伝統工芸 | (株)okicom 常務取締役 琉球びんがた事業協同組合 特別顧問 「琉球びんがた普及伝承コンソーシアム」事務局長 | ○ |
| 久万田 晋 | 民族音楽/民俗芸能 | 沖縄県立芸術大学 芸術文化研究所長 教授 | Web |
| 知念 賢祐 | 空手 | 沖縄空手道古武道連盟ワールド王修会 会長 | Web |

(3) 議事録詳細版

1. 開会・あいさつ

(省略)

2. 令和4年度 万国津梁会議の進め方について

【波照間委員長】

皆さんこんにちは。知念委員と久万田委員は Web での参加ですが、どうぞよろしく願います。

本日は琉球文化ルネサンスに関する万国津梁会議の2年目の第1回の開催になります。

昨年度は3回の会議を開催し、そのなかで琉球文化ルネサンスの実現に向けて、沖縄県としての一体的な取組に繋げていくための様々な方策等について議論してまいりました。これについては中間報告を取りまとめて知事にもご報告しております。今年度は、この中間報告の内容を踏まえて、来年の3月の最終的な提言に向けて議論をさらに深めて具体的な方向性を指し示していくことができるように、実効性のある提言を準備したいと考えております。どうぞ皆様、今年度も引き続きご協力くださいまして、立派なビジョンが提言できますようにお取組いただきたいと思います。よろしく願います。

それでは会次第に沿って、進行していきたいと思えます。まず、次第2の「令和4年度万国津梁会議の進め方」について事務局より報告をお願いします。

【事務局】

資料1、参考資料1 説明 (省略)

【波照間委員長】

ただいま事務局が説明した内容について、意見あるいは質問がございましたらお出しただきたいと思えます。

中間報告のこの部分はこう直したほうがいいんじゃないかということも含めて、振り返りをさせていただいてもよろしいです。根幹に関わるような、琉球文化ルネサンスとは何か、琉球文化ルネサンスの概念は一般県民にちゃんと伝わるよう整理されているかどうか、といったことも含めてご意見がありましたらお出しただけるとよろしいかと思えます。

他に今年度のスケジュール等々についても問題ございませんでしょうか。

特にご意見もないようなので、説明いただいた資料1の方向性を確認いたしまして、これからの議論に進んでいきたいと思えます。

それでは、次第3の①「県の関連施策の状況について」を事務局より説明をお願いします。

3. 議題①県の関連施策の状況について

【事務局】

資料2 説明 (省略)

【波照間委員長】

説明でもございましたが、中間報告で取りまとめた(1)琉球文化を一体的に捉えた戦略的取組の必要性について、「新・沖縄21世紀ビジョン基本計画」や「第9次沖縄県伝統工芸産業振興計画」などの県の政策では、詳細を見れば書かれているかもしれませんが、いわゆる厳密な意味での1対1対応の項目はありませんということでございます。皆さんのほうでこういう方向を模索すべきじゃないかといったご意見がございましたら、お出しただいて構わないと思えます。いかがでしょうか？

【上里副委員長】

琉球文化を一体的に捉えた戦略的取組についての考えが、県の政策に明確に記されていないことについては、昨年度も少しお話ししましたが、やっぱり県はいろんな個別の事業は

頑張ってるんですけども、全体的な戦略やビジョンみたいところや、最終的にどうなりたいというところが希薄な傾向にあるのかな、まさにそれを反映したような形になってしまったなと思います。我々がこの万国津梁会議で提案したことに対し、その実現性をどういうふうにしていくかという問題について、現在の状態ですと、おそらく達成できないという形になってしまうと思います。

21世紀ビジョンでもそれが明確に書かれていないということであれば、それをどういうふうに今後具体的に県の政策として補完していくのか、対応していくのか、ということを含今年度の議論の1つにしてもいいのではと思いました。個別の具体的な計画とか、いろんなものはもちろんいいと思うんですけども、そのあたりの対策や対応を今回は意識すべきなのかなというふうに感じました。

【いのうえ委員】

行政の仕組みとして、一度つくられた基本計画などにこの万国津梁会議で話し合ったことが遡って反映されてるってことはないですよ。そうすると具体的に実現性を持たせるためにどういった方策があり得るんでしょうか？言いつばなしになったら意味がないと思っています。

【波照間委員長】

今のお話について、県のほうから行政としての筋道をお話いただけますか？難しい問題だと思うんですけども、だいたいこういう方向性ということでもいいです。

【事務局】

ご意見ありがとうございます。この琉球文化ルネサンスという文言ですが、首里城復興基本計画のなかで初めて触れられたものでございまして、「新・沖縄 21世紀ビジョン基本

計画」にも盛り込まれております。「新・沖縄 21世紀ビジョン基本計画」は、県の計画体系の中で最上位の計画で、法律でいう憲法にあたるものになり、これに基づいて個別計画が作られてまいります。ですので、万国津梁会議のなかで、琉球文化ルネサンスを個別の関連施策と結びつけて提言していただくと、各部局が個別計画の中で反映させることができます。

【山里委員】

私は最初のほうから、ルネサンスとは一体何を意味してるのか、ということをお聞きしてきました。首里城を中心としたルネサンスというのはちょっとわかりにくいですね。だからルネサンスという言葉の説明したつもりですけども、要するに文化の再生であったり、文化の深い斬新な変化であるとかですね。

あるいは個々の人々の変化であるとか、意識の変化であるとか。もっと言えば、これから文化を継承する沖縄の若い世代が、どのように琉球文化・沖縄文化を捉えて、それに高い関心を持って自らの文化として継承していくかというのが、本来の意味でのルネサンスだと思います。

だから、いろんな個別的なものはたくさんありますけども、それが総花的に、表層的に流れてしまうとルネサンスではないです。

深い意識の変化のなかから琉球文化というものをもう一度理解するというのがルネサンスの本来のあり方ではないか、ということをお聞きしてきました。ただ、抽象的にしか言えませんが、今挙げられている個別的なものが収斂していく方向にベクトルが動いていく、ということが、いわゆる一体的に捉えた戦略的取組ということになってるんじゃないかなと思います。そのためにはどうするかということが議論になるかと思っています。

【波照間委員長】

どうもありがとうございました。

武村課長のご説明で、万国津梁会議で議論をして、個別具体的な実効性のある方向性を我々が打ち出せば、これが県庁内部の各部局で実現されていくような構造になっているということでした。難しい問題だと思うんですね。結局、21世紀ビジョンが、我々が出した琉球文化を一体的に捉えた戦略的取組という問題意識を明確にし得なかった。まるきり考えてないってことではないと思いますが、そういったことを明確に文言化しなかった。これはやはり問題にすべきだと思います。ですから、我々のほうから、まさしく提言しているということだと思うんです。

先程、山里委員が話したように、若い人たちに沖縄文化、琉球文化に対する意識をしっかりと持ちってもらうという根本的な問題から始めて、県の具体的な施策、実現性のあるものとして、こういったことをやってもらうと効果的ですよというふうな方向で議論をつくりあげていくということだと思います。

小渡委員や富田委員からは何かありますか。

【小渡委員】

中間報告の内容が県の政策から漏れてしまっているということに関して、はっきり確認しておきたいところですが、当然、遡って県の計画を修正することはできないですし、この琉球文化ルネサンスというコンセプトや意識は、たぶん総論でしっかりと網掛けをしたうえで、各論で個別具体的な政策を走らせていかないといけないというのは、多分共通認識であるのかなと思っています。しかし、上の計画には被せられずに下の計画で、万国津梁会議でまとまった内容を各部局と連携していきながら、言ってみれば染み渡らせるようなイメージで実行していくしか方法がないという理解でいいでしょうか。

【事務局】

ご理解のとおりで、万国津梁会議で議論していただいて、琉球文化ルネサンスとはこういうものだというものを打ち出していただければと思います。「新・沖縄 21 世紀ビジョン基本計画」では、琉球文化ルネサンスは文言としては入っていますが、どういったものなのかその概念は明確ではございませんので、それを議論していただくのが、この万国津梁会議の場にあります。また、万国津梁会議で定義づけた琉球文化ルネサンスというものをどう個別計画に落とし込んでほしいのかということをご提言いただければ、各部局も各個別計画に落とし込めると、そういう流れになります。

【波照間委員長】

ありがとうございました。今の説明でよろしいかと思いますが、この認識でいくと、我々の提言が「新・沖縄 21 世紀ビジョン基本計画」を書き換えることにはならないけれども、我々の提言が具体的な政策としてこれに肉付けをしていく方向性であることを、共通の認識にしておきたいと思います。

それではこれから、議題 3 の②「具体的な事例検討の方向性について」を事務局より説明をお願いします。

3. 議題②具体的な事例検討の方向性について

【事務局】

資料 3 説明（省略）

【波照間委員長】

ありがとうございました。この議題が今日の会議の肝の部分ということですね。これまで話した事柄をいかに肉付けしていくかということに関連した議題です。活発なご発言を

期待したいです。

【富田委員】

資料3では、中間報告の提案②、提案③に基づいた具体的な事例をお示しいただいていますが、提案①のほうがやはり非常に難しいと感じてはおります。おそらく平時であれば提案②と提案③が中心になってもいいとは思いますが、やはりコロナを経験した今、提案①「持続可能な仕組みづくり」に基づいた事例が必要ではないかなと思います。例えば、もともと継承者が高齢化していて継承が非常に難しい祭祀芸能であったり、工芸や舞台芸術やしまくとぅばなど、人と人が会ってかろうじて細い糸が繋がっていたものが、コロナを経験して対面の活動ができなくなってしまい、その細い糸が途切れそうになっている様々な分野があるんじゃないかなと思っています。そのような危機感を、せめて共有するとか、同じ課題に直面した異分野の仲間がいるみたいなことを、具体的な事例のなかで示せるといいですね。持続可能な「仕組みづくり」まではいなくても、持続可能な仕組みづくりが「必要である」ということを共有するような具体的な取組が必要ではないかと思いました。

【波照間委員長】

ありがとうございます。コロナというまさに世界的規模の災害のなかに我々は今いるわけですが、そういったなかでこの琉球文化ルネサンスという問題を具体的に進めるためには、この取組がいかに持続可能なものとなるべきか、その仕組みづくりについて考えるべきではないかというのが、富田委員の発言の趣旨でした。

【久万田委員】

特に提案③を見てると、昨年度の会議で他

の委員から「新たな価値をつくるのはいいけど、それを外に向けて分かりやすく伝える努力をしなければいけない」というようなご意見があったかと思います。そのご意見に非常に共感させられました。やっぱり沖縄の若者に沖縄の文化の価値を認識させるのはいいんですが、今、これだけ観光客やインバウンドなど県外や海外の方がたくさん訪れるのに、どのように沖縄の伝統的価値や新たな価値を伝えていくかという部分を盛り込む必要があるのではないのでしょうか。検討内容に、どのように外部の方に沖縄の文化の魅力を伝えるのか、工夫するっていう文言が必要なのではないかと。私の意見というよりは、前年度の会議でもそういうご指摘がどなたかからあったかと思いますので、ぜひ盛り込んでいただきたいと思います。

【波照間委員長】

ありがとうございます。新たな価値を創出するとして、それをいかに外部に発信していくかを模索すべきである、その文言を入れるべきだというご意見だと思います。

【知念委員】

今の久万田委員のご意見とリンクしますが、空手を例にしますと、空手の場合はまずビジョンがない。今、海外の空手に関しては、沖縄の空手はどの方向に進むのかということは大きな課題としてあります。やっぱり伝統空手を推進するのか、それとも現代的なスポーツとして推進するのかっていうのは、海外でも非常にあやふやで、どちらもやられている。同じ空手だからいいんじゃないかという趣旨でしょうけども、それは外国人にはちょっとあやふやに映ってしまっていて、沖縄ではほとんど理解されていません。

専門的に空手をやっている人たちは結局、競技でメダルを目指すのか、それとも伝統的

に従来から行われていた人間形成を推進するのか、そのあたりで何を狙っているのかが全然見えない状態で外国では行われています。それじゃあ自分たちの国の文化に合わせてやっっていこうということで新しい流派がいっぱいできていますが、それにより錯覚が起きて、世界に沖縄の空手が広がっているんだという見方が多いのだと思います。しかしもう一度、原点に帰って、過去からある文化とはどういうものなのか、もしくは今これから将来に向けてのビジョンとして、どうしていかなければいけないか、若い人たちへのバトンタッチはどうするのか、その辺りも根本となるところから足元を見つめて発信し直さなければならぬと思います。今のままでいろんな枝の部分の話あっても、個人的にはちょっと賛成しかねます。

【波照間委員長】

ありがとうございます。ちょっと乱暴な取りまとめをすれば、先程の久万田委員からあった伝統文化の伝え方の問題というふうに集約できるかと思えます。

参考資料3の52ページに沖縄空手振興ビジョンの抜粋がございます。この資料に基づいて、知念委員からご指摘されたいわゆる沖縄空手が、スポーツ空手を伝えるという考え方なのか、伝統空手を伝えるという考え方なのか、その辺りが海外の人には実は伝わっていないんだというような指摘だったと思います。この沖縄空手振興ビジョンや知念委員のご指摘について、県の考えを説明できますか？

【事務局】

本日は空手振興課が出席しておりませんが、事務局で持ち帰りまして次回ご回答させていただきますと思います。

【波照間委員長】

資料3の2ページにある「学校現場での歴史・文化教育に関する取組」については、去年の会議で上里委員から中城村のごさまる科などの話が出されていたかと思えます。そういった個別の市町村レベルの取組については石垣市でも教科書のようなものをつくって、八重山地域の歴史と文化を伝える取組をしているなど、いろいろ事例はあるかと思えます。ただ、それがどれほど有効に動いているか、あるいは沖縄県全体としてどのような力になっているかというところが問題かなと個人的に思っているんですが、皆さんいかがでしょうか？大田委員から八重山の取組などお話できることはございますか？

【大田委員】

八重山では歴史文化に関する立派な副読本を一括交付金でつくったわけですが、慰安婦や南京大虐殺の記述があるという議員の指摘がありまして、配布を中止したということがありました。これは大変な問題だと私は思っています。慰安婦や南京大虐殺については日本政府がすでに認めて公式の見解を示しております。政治の横槍でこの立派な読本が配布中止されてしまいました。それに代わる副読本は今のところつくられておりませんし、つくる計画もないとのこと。首長や政治家が変わったりすると、副読本がすぐ取り下げられてしまうというようなことがあってはいけないのではないかと思うのですが、他の市町村でもそういう例はございますか？

【上里副委員長】

話が少しだけずれるかもしれませんが、今年度、浦添市の一般社団法人りっか浦添が浦添の歴史と文化を記した小冊子を作成し、市内の小中学生全員に配布しました。私もその監修に関わりましたが、これは市の事業では

なくて、民間団体が学校教育の現場に活用してほしいということで教育委員会と市に働きかけた事例になります。大田委員がおっしゃるように、その市町村の政治の状況で歴史・文化教育が左右されてしまうということが問題の1つにあるのかなと思います。どうしても各自治体の裁量はありますから、おそらく今回の議論では、歴史教育そのものだけではなく、教育を取り巻くような現状のなかで、どういうふうに沖縄歴史教育を有効的に行うかという視点を特に重視する必要があるように思いました。

特に今回の問題は、沖縄の問題だけではなくて、教育指導要領とかどうしても動かさない部分が多々あると思うんです。その合間でどうやって効率よく、しかもやりやすく歴史教育をしていくか、具体的に実現するためには、必ず避けて通れない問題だと思います。例えば教科書の問題にしても、中城村ごさまの科は一括交付金で教科書を作成しましたが、現在は財源が足りないということで、教科書が各生徒に配布されるのではなく、レンタルのような形で使いまわしをしているようです。そういった教材の問題についても、例えば県が財政的にどういうふうに支援できるのかとか、教育そのものだけじゃない、もう少し広い範囲で議論すべき気がしました。大田委員のお話も含めてです。

【山里委員】

上里委員のご意見に全く賛成するんですけども、この問題は今に限ったものではありません。私が中学生のころ、50年か60年くらい前に仲原善忠先生が書いた『琉球の歴史』という教科書を上下2冊買わされましたが、中学校で1回も使えませんでした。ただ置いてあるだけです。

それから仲井真知事の時に、私は頼まれて沖縄県振興審議会の学術文化・人づくり部会

の部会長を務めました。その時は引き受ける前にしまくとぅばを柱にしていっていいということで引き受けました。すると、少しでもいいからしまくとぅばを学校現場で導入しようという提案がありましたが、その時に最も強く反対したのは教育庁の皆様でした。先程も上里委員がおっしゃいましたように、とにかく文科省のカリキュラムのなかで入れるのは大変だ、時間も無いということで、あまり乗り気じゃなかったんですが、一応、答申に入れました。

それから時間が経って、今は波照間委員長が中心になって活動されています。いろんな形のしまくとぅばのバリエーションで、社会にいろんなものが出てきたということがあります。ただ、色々ご指摘もございますけれども、しまくとぅばが実際に活用されているかどうかという、非常に心配です。だからできたらこの部会でももう一度、何らかの形で沖縄・琉球文化を考えるのであれば、言葉の問題はどうしても無視できないことです。何らかの形で実践する、子供たちや次の世代に向けて教育していくということもやっぱり考えています。これは非常に大事なことじゃないかと思います。

【小渡委員】

今の議論を拝聴しておりまして、思ったところは、21世紀も1/4を過ぎそうになっておりますが、伝え方とか、つくったけど利用していないとか、やっぱり世の中も変わってきていて、子供たちのITリテラシーが上がっていますし、1人1台のiPadが小学校、中学校で完備されているとか、状況は変わってきています。なので、何かしら新しいものをつくるのであれば、やっぱりデジタルがメインであるべきだろうなと感覚的に思っています。デジタルにすることで何回ダウンロードされたのかとかわかります。しまくとぅばも文

字で見ると正しい音がわかりませんが、デジタルだと音声を再生できたり、動画っていうメディアが使えます。そういうふうに、デジタルの活用をちゃんと考えていくことが大事なのかなと思います。また、デジタルなんで基本的に印刷しなくていい、紙代もかからないなど、いろんなメリットがあると思います。また、入り口をどう入りやすくしてあげるかという視点でいえば、特に子供たちへの教育のなかでは分厚い副読本を渡されても読む人はおそらく少ないのではないかと思います。例えばインスタグラムなど彼らが日常触れているメディアで、7枚ぐらいのスライドで概要を伝えてあげて、興味が持てたところからより深めていくとか、メディアや伝え方を変えていくといった工夫をしていかないといけないと思います。つくる側の目線で作っても同じことが繰り返される可能性があるので、やっぱり今の子供たちの関心も踏まえて、どこからだったら入っていけるのかとか、そういったところも分析をしたうえでアプローチを図っていく必要があるのかなと思いました。

もう1点、話は変わりますが、県内の事例を探して議論を深めて可能性を見つけ出すところかと思っていますが、必ずしも県内の事例に限る必要はありますか？日本や世界っていうスコープで見たりすると、成功例、ベストプラクティスのように、こういったやり方をする事でこういう課題が解決された、といういい事例は、ちょっとリサーチすればあると思います。そういったもの、沖縄県内だけにこだわることはないのではと思いました。

【波照間委員長】

ありがとうございます。小渡委員の事例のお話に関して、私も個別の事務局とのミーティングでは、しまくとぅばの普及のために

ハワイを参考にしているということは話しています。ハワイは言ってみれば成功事例の1つとしていろんなところで参照されています。そういう意味では今回の事例検討は沖縄に限定しているということではないと私は思っているんですが、事務局はいかがですか？

【事務局】

事例は特に県内に限っているわけではないので、やり方を工夫して県外、海外のベストプラクティスについても情報収集をしたいと思います。

【波照間委員長】

ありがとうございます。他に富田さん、どうぞ。

【富田委員】

子供たちもそうですが、まず子供たちに教える先生方ご自身が必ずしも沖縄の文化に触れているかということ、そこも非常に危ういところがあるかと思います。非常に熱心な先生がご自身で三線を習っているとか、何か伝統文化に興味がある方は本当に限られているのではないかと思いますので、専門家の派遣のような仕組みというのがまず大事だと思いますし、小渡委員からもありましたけれども、こういう時代なのでデジタルの活用というのが気になっています。体育の授業でダンスが選択できるようになったときに、EXILEのダンス教材がバカ売れしたようです。それはやっぱり先生自身がダンスをやったことなのに教えることになったので、すごく大変だったと思うんですね。じゃあ例えば沖縄の全ての子供たちに、卒業するまでにかぎやで風を必ず踊れるようになるとか、空手の普及型が必ずできるようになるとかにしても、具体的な教材となるものをあげて、先生たちに教えてねって言うのはなかなかできないので、

1つの方法として専門家の派遣、もう1つはきちんと教材化をして、先生方の負担になることなく授業に取り入れやすい形をつくっていくことが必要ではないかなと思いました。

余談ですが、参考資料3の34ページにバレエ学校での琉舞指導の写真が出ていますが、これは私が企画したものです。講師を派遣して、生まれてからずっとバレエをやってる子供たちに2日間だけかぎやで風を体験してもらいました。体験をしていただいた上で琉球芸能の1時間の公演を観ていただいたら、自分の体を動かした後に触れる本物の芸能に非常に深く感動されていて、その後もぜひ沖縄の芸能を学びたいということで交流が続いているというところもありますので、ぜひ子供たちが見たり聞いたりするだけでなく、自分の体を使って体感できるような形が取れればと思います。

【波照間委員長】

ありがとうございました。いろいろアイデアが出てきていますが、ほとんど学校での歴史文化に関する教育のほうに皆さんのご指摘が集中している感じがいたします。他にも離島における伝統文化の活用である、異分野との連携とかもございませう。いかがでしょうか？

【大田委員】

離島の伝統芸能・伝統工芸などを活用した地域振興の取組というのがありますが、離島と言いましても、石垣市と竹富町、与那国町はちょっと事情が違っております。竹富島と西表島では、住民のほとんどが本土の人が大多数を占めています。そのなかで祭りを継続させていくためには、やはり本土から移住してきた人たちが祭りのなかに取り込んでやっていくというようなことが行われております。そして離島振興の企画プロデュースに携わ

っている方や機関は、大きい石垣市でしたらそういう方はいらっしゃるんですけども、竹富町や西表島はほとんどいません。ですから、それは民俗芸能、祭祀芸能として行っているということです。

実は市民会館とか、近代的な設備の舞台で踊っている組踊とか琉球古典舞踊などと違って、民俗芸能は多くの方が参加して大体屋外でやりますね。ですからそういう広場のような施設というものがやっぱり必要ではないかなと思います。市民会館等で民俗芸能をすると、そこでは民俗芸能の持っているエネルギーとかパワーとかそういうものがみんな失われてしまうと感じます。なので建築家や市民会館というものをつくる人たちは組踊とか琉球古典とかバレエとか、そういうものにだけ目を向けるのではなくて、民俗芸能の持つエネルギーが発散できる施設をつくってほしいなと考えました。

また、離島ではプロデュースする人っていうのがほとんどいないですね。市町村でもそんな人がおりませんので、できたらそういう市町村の職員を県に派遣するとか、文化庁とかメセナの企業体に派遣して、予算の取り方とか横の繋がりとかを吸収できるようにすると、離島の芸能というの、外に出て行って、講演することができると思います。

それと、できましたら私は宮古・八重山の離島は芸大と国立劇場とは別に、民俗芸能を勉強する大学か施設をつくったほうがいいんじゃないかなと思います。それができなければ芸能交流でもいいですし、芸能交流の船を宮古、八重山、久米島間でもいいですし、走らせることによって交流を深めていけたらいいなと思っております。以前は台湾や中国と八重山芸能の交流もあったわけですが、今は政治情勢もあって行けなくなってしまったんですけども、私たちはもっと南の方との繋がりも考えていく必要があると思います。そ

れが自分たちの島の芸能というものが、他の国との交流のなかで取捨選択されて最後には残ったものだということ、そしてそれが私たちの先祖をつくってきたパワーとして残ってきたんだということがわかるのではないかと思います。そのためにもやはり国際的な交流というのは必要じゃないかなと思います。

【波照間委員長】

ありがとうございます。八重山の具体的な事例を話しながらということでしたが、民俗芸能が交流するための機関が必要ではないか、具体的には国立劇場おきなわや県立芸大の名前も出てきましたけれども、これについてはかねてから山里委員から、いわゆる宮古・八重山にコミュニティカレッジをつくるべきだ、という発言がございました。今の話と関連させていかがですか？

【山里委員】

私がコミュニティカレッジの話をしたのは、大田委員が芸大の分校についておっしゃっていたので、こういうことも考えられるということでお話しました。私はそれも素晴らしいと思います。ただ、芸能だけではなくて、もう少し広げた形のものがあってもいいんじゃないかということで、ハワイの例を出しました。人口5万あれば、ハワイはコミュニティカレッジをつくってるんですよ。2年通って、4年制に繋げるということですね。それによってハワイの島々が非常に誇らしく、自分の文化を持っているという状況でしたので、そういうことを申し上げました。

特に宮古・八重山であれば、大変魅力的な島ですので、これは沖縄あるいは日本全国、あるいは大田委員が申し上げましたような南のほうからも、世界中から若者が集まるような非常に素晴らしいものになるのではないかなというふうに考えて申し上げたわけです。た

だ、実効性ということになるとすぐにはできないと思います。知事あるいは県、あるいは総務省や文科省を巻き込んだ大きい仕事にはなるとは思いますが、もしこれが実現すると本当に沖縄全体の底上げになりますし、1つのルネサンスとしての事例になるのではないかなあえて申し上げたところでございます。

もう1つだけ申し上げてよろしいですか？国際政治という言葉が出ましたので、実は沖縄のディアスポラ、海外のウチナーンチュたちも巻き込んだ形でのルネサンスを考えたほうがいいんじゃないかなと思うわけです。実際に今、海外のウチナーンチュが非常に盛り上がっているわけですね。世界のウチナーンチュ大会を見てもわかるように、今まで移民のなかで非常に下積みの人達だったのですが、だんだん力をつけてきて大変元気が出てます。実は富田委員が出演した、ジョン・シロタさんが書いた「レイラニのハイビスカス」という劇は、沖縄や東京、ロサンゼルスでも上演して、沖縄の人たちが多く見に来てました。

それから最近、ハワイの若い県系3世、4世たちが書いた文学のアンソロジーが出ます。私が推薦文を書きました。このなかで、例えば御冠船歌舞団というグループの作品は、非常に素晴らしいオペラになっているような感じがします。そういう意味でも沖縄だけの伝統的なものではなくて、いろんな外国の要素とかを盛り込んだものが入ってきてるという感じがするわけです。これも1つのルネサンスではないかなと思ったりします。

少し突飛なことを申し上げますが、ビートルズが最初に登場したときは、なんでこれが音楽なのかと私たちは思ったんです。あとでよく分析してみますとハーモニーであるとか、詩が韻を踏んでいるとか構成が伝統的なものでした。ということも踏まえて、実は斬新なものが伝統的なものから生まれてくるということもよくわかりました。ぜひハワイ、北米、

中南米、それから世界に拡散してる沖縄の人たちの力を合わせて、沖縄的なグローバルなルネサンスがあってもいいのではないかなと思っています。そうすると、もっと斬新な、沖縄の若い人、世界の若い人は沖縄文化って面白いなと、そういう形でできるといいなと思ったりしてます。

【波照間委員長】

ありがとうございました。いろいろご意見をお出しいただきました。今日は特に方向性を決定する必要ございません。

教育の問題などは、歴史や文化の教育をどのように将来にわたって担保していくか一時の権力者の意向によって、琉球・沖縄の歴史や文化を伝えることが止められるようなことがあってはいけないということは、共通の認識として持っていると思いますが、そういったことを琉球・沖縄の文化、しまくとぅばも含めて今後どのような形で根付かせていくか。私自身が思っていることはあまり申し上げておりませんが、この後も会議は3回ございますのでそこで私自身の見解を申し上げさせていただきたいと思っております。いずれにせよ、教育が非常に重要な問題であると言うことは一致しました。

山里委員から出た、世界のウチナーンチュ、沖縄ディアスポラの問題については、今年が世界のウチナーンチュ大会もございますので、大会が今後も継続して行われるような仕組みのようなことを改めて我々も考えていかないといけないだろうというふうに思っています。これについても具体的にどのような仕組みをすれば、世界のウチナーンチュ大会や世界中にいらっしゃる沖縄ディアスポラの人たちと、いわゆる母県と言われる沖縄県の我々が協働して何ができるかということを考えていかなくてはならないだろうと思っております。

【山里委員】

世界のウチナーンチュ大会の件でずっと考えていることがあるのですが、富田委員にもお聞きしたいのですが、例えば音楽や踊りなど世界のウチナーンチュの芸能大会を、世界のウチナーンチュ大会の時に一緒にやるとか。そうすると、例えば南米と琉球がフュージョンしたようなものや、その地域の音楽と琉球の音楽が出てくるのではないのでしょうか。例えばロックバンドの紫のジョージ紫さんが評価されたのは、ロックと琉球音楽を非常に美しくフュージョンさせたというところにあります。踊りや芝居やオペラとか、いろんなものが出てくるんじゃないかなと感じます。これも琉球文化ルネサンスではないかなと思ったりします。ただ 100%純粋な文化は無いと思います。文化はいろんなものが混じり合っていてできているものです。そういう意味でも琉球文化ルネサンスの隆盛や、財政も考えた時に、ウチナーンチュ大会を契機に、一緒にそういうこともやってみることも1つの持続可能なやり方ではと思います。

【波照間委員長】

ありがとうございました。そろそろ終わりかと思いますが、資料3の3ページにある「事例検討の進め方」について急ぎで皆さんからご意見をお伺いしてこの議題については閉じたいと思います。先程、事務局からワーキンググループあるいは関係者ヒアリングというような形で、宮古の方を委員に加えることはできないけれども、こちらにお招きしてご意見を聞くことはできるだろうという説明がございました。私は久米島なども必要だろうと実は思っています伊平屋、伊是名なども当然考えなきゃいけないとは思いますが、具体的にどういう場面でそれをするかということが問題だと思うんです。皆さんいかがでしょうか？

事例検討については基本的には事務局で検討すべき事例を調整して聞いていくということでしょうか？むしろ我々からこういう事例をヒアリングしてくださいと出すのが本来かなと私自身は思っているんですが、いかがでしょうか？皆さんからこういったことを聞いてくださいということがあれば出してもらっていいですね。むしろそのほうがいいと思うんです。いかがでしょうか？

【事務局】

ぜひ委員からご意見を出していただければと思います。

【いのうえ委員】

まず先程から世界のウチナーンチュの話が出ておりますが、せっかく10月にウチナーンチュ大会が開かれるので、何らかの形で万国津梁会議と連動したような会議を持って、文化の振興に取り組んでいらっしゃる方々の事例を直接お聞きするような場があってもいいんじゃないかなと思います。さっきのスケジュールを見てるとちょっとギリギリすぎるのかなっていうのが気になっています。

それと提案③新たな価値の創出で、異分野と連携した取組っていうものがありますが、中間報告の提案と県の個別政策との関連のところ、観光に関する政策のなかで文化が弱いっていうのが第一印象なんです。パッと見ても文化の部分が空欄になっているところが多い。観光は沖縄の基幹産業であるにも関わらず、こういうふうに文化が蔑ろにされてはないと思いますが、文化に関する項目が全然ないというのがちょっと気になるので、その辺をこの万国津梁会議のワーキンググループのなかでも、強化するような取組ができるといいなあと思いました。

私自身が首里染織館 **suikara** の運営に関わっているものですから余計、最近思うのです

が、観光客を呼び込むための取組をやろうということ、観光関係の方々と接することがとても増えました。すると文化に対する理解度が浅い、表面的に捉えていらっしゃる方が多いという印象がとても強くて。富田委員が仰っていた、教育現場で先生自身が歴史文化を知らないっていう話がありましたけど、観光客に発信するはずの事業者が知らないっていうこともありますので、その辺も何か強化する取組ができればと考えています。

【小渡委員】

先生が知らないということと観光事業者さんが知らないということは、たぶん片方だけ見ても、片手落ちになっちゃう可能性もあります。職人側が情報開示をしているのか、積極的に受け入れているのか、受け入れる場所があるのか、などかなり複雑な背景があると思っています。紅型の工房だと狭いし、人を呼べるような場所じゃなかったりもします。他県の石川県とか福井県鯖江市の事例ですと、「見せる工房」に対する助成金があって、内装工事やリノベーションするためのお金が助成されているところがあります。それにより職人と先生や関係各所の人たちのコミュニケーションを取れる場所ができています。そのような場づくりがそもそも沖縄ってないんです。なので、やっぱり構造的に一方だけを責めるところではないのかなと思ったりもします。当然意識を変えていく必要があると思うんですが、じゃあやろうと言った時に職人からすると、「仕事をする時間を止めて無料でレクチャーするんですか？」っていうのもおかしな話になるので、ちゃんと予算措置をしてあげて、工房見学するとか、手習いを教えるとか、そういったものに対してもちゃんと支払われるようにしないとダメです。稼働部分がないと、なかなか持続可能な仕組みは構築し得ないので、そこに関する予算措置

があるのであれば、すごくいいなと思ったりしたところですよ。

時間的にも最後の発言かと思うので付け加えたいのが、新しい価値の創出の「異分野×(かける)」というところなんですけれども、ぜひweb3.0の文脈に関してはよくよくリサーチをいただきたいと思っております。岸田首相も含めて、日本のみならず世界においてもインターネットの新しい次元のプロトコルを走っているweb3.0というものに関して、おそらく沖縄県民のみならず、日本においても10人中1人の反応があるかないか、というレベル感だと思っております。逆に言うと、この現状において沖縄県として、例えば沖縄県民の電子ウォレット保有率が20%、30%とか、その仕組みを使うためのスマホとかの機能を持っていると思うので、やればできると思うんですが、やらなかったら永遠にできないですし、完全にスピード勝負になってくる場所もあります。その仕組みや使い方を理解して行動を起こしていくのは、本当に今、全世界がよい、ドン！でスタートし始めた状況です。これは東京でやってないから、沖縄でできないとか、ちょっと事例を見てみたいとかいうものではなく、新しい事例をつくっていくという観点で考えなくてははいけません。先行事例がいくつかありますので、そこで学びながらも、この分野で僕らが最初の事例になり得るっていうのはたくさんあるはずなんです。別に強制や批判をするわけではないですが、前例がないとできないとか、とりあえず聞いてみるかっていうのではなく、この新しいチャンスに対してどう沖縄県として取りに行くのかっていうのは、それこそ戦略をきっちり練って進めていくべきではないかなと思っておりました。

【波照間委員長】

ありがとうございました。いろいろまだ、

申し上げたいこともあるかと思いますが時間の都合もございますので、とりあえずヒアリング等々についてご意見がありましたら事務局まで直接ご連絡をお願いしていただくことでよろしいですね。事務局には、いつ頃までに意見を伝えてくださいという期限はありますか？

【事務局】

今日の議事録を早急に取りまとめて、各委員のほうに照会をかけさせていただきますので、それに合わせて追加で意見がございましたらその際にいただければと思います。

【波照間委員長】

ありがとうございます。では、そろそろ予定の時間を超えてしまっております。ここでひとまず議論を終了させていただきたいと思っております。皆さんの活発なご意見を出していただきましてありがとうございました。本日の議事録を取りまとめしまして、また皆さんにご覧いただくという段取りですので修正やご提案の追加がございましたらその際にいただければと思います。

知念委員と久万田委員も他にご意見がないようですので、事務局にお返ししたいと思います。

4. 閉会・事務連絡

【事務局】

波照間委員長、委員の皆様、ありがとうございました。今後の予定についてですが、本日委員の皆様からいただいたご意見を踏まえ、議事録を作成し、後日、皆様にご確認をさせていただきますので、調査や事例検討についてまたご意見いただければと思います。具体的な事例の検討状況等については、第2回会議で報告させていただきます。事務局からの連絡事項は以上でございます。

それではこれもちまして令和4年度 第
1回「琉球文化ルネサンス」に関する万国津
梁会議を終了させていただきます。

皆様、本日はありがとうございました。